まちの史跡めぐり

202

猿田彦大神と庚申尊天(2)

町文化財専門委員
石瀧 豊美

江戸時代中期の明和9(1772)年は、語呂合わせで当時の人々を恐れさせたと言います。なぜなら「めいわ・くねん」は迷惑年に通じるからです。元号が明和に決した時、いずれは9年が来る、その時迷信深い人たちがどう考えるか、どう受け取るか。さすがにそこまで頭を巡らせた人はいなかったようです。ともあれ、そのように人々が不安な思いで待ち構えていた時、2月29日、江戸三大大火のひとつと言われる明和の大火(死者数1万4700)が起こったのですからたまりません。やはり元号が悪いということになり、その年11月、ついに安永へと改元されてしまいました。

そのようなユニークな来歴を持つ元号「明和」。新原のバス停近くに建つ「猿田彦太神」(大神ではなく太神と読めます)の碑に「明和五歳/六月上旬」と書かれていたので驚きました(写真❶)。〝迷惑年〟の4年前、明和5(1768)年の建立でした。

前回「集落の出入り口に当たるところ、あるいは三つ角、四つ角など、道と道が交差するところに石碑が立っていることがよくあります。」と書きましたが、新原の猿田彦の碑はまさしく三つ角に当たります。現状は整地された区画に、「海軍炭礦創業記念碑」案内の石碑と並んでいますが(写真❷)、整地される前も同じ場所にあったことを覚えています。なお「猿田彦太神」碑の上部には右側に「太陽」をあらわす○、左側に三日月の裏返しの形をした「月」(旧暦26日の月)が描かれています。ただし、そう厳密に裏表を気にする必要はなく、文様として見た場合は三日月と考えてよいようです。大相撲の行司の軍配にこの日月の文様が描かれています。

日月(太陽と月)は中国の陰陽五行の考え方では、太陽が「陽」、月が「陰」をあらわし、並べて描く時には陰を向かって左に、陽を向かって右に描くのが正しいということです。「猿田彦太神」碑はその約束に従っていることがわかります。私の見た範囲では猿田彦の碑で日月を配したものは記憶にありません。大神が太神と書かれていても意味は同じと思われますが、わざわざ「太」の字を使ったのも珍しいと言えます。

猿は農耕馬の守り神で、「厩神」として祀られていました。そこから、猿田彦大神と庚申尊天は猿・申(どちらも「さる」)によって、安産や豊作を祈願する「厩猿信仰」とも重なります。豊作・不作は人々の生存を左右することから、最重要な関心事でした。

写真❸は須恵町立歴史民俗資料館です。農具などの展示の中に「田の神」2体が置かれていました(写真❹)。以前は受付のあたりに置かれていましたが、現在の展示のように農具を背景にしていることに意味があります。本来は田の畦などに立っていたものです。

ウィキペディアの「田の神」の説明の中で「タノカンサァ」(田の神様)にふれています。資料館開館の際に、九州全域を回って資料集めをしたということですから、資料館の「田の神」は須恵町や糟屋郡とは関係がなく、鹿児島県で収集されたタノカンサァであろうと思われます。タノカンサァは旧薩摩藩領に限って分布しています。

「田の神の石像が九州地方南部の薩摩、大隅、日向の一部(都城周辺)に限って分布することは注目に値する。ここでは、集落ごとに杓子やすりこぎを持ったタノカンサァ(田の神さま)と称する石像を田の岸にまつる風習がみられる。」(ウィキペディア「田の神」)

写真❺から明らかなように、2体共に右手にしゃもじ様のもの、左手に茶碗様のものを持っています。向かって右側のタノカンサァは顔におしろいを塗っていますが、「年1回春に、田の神に念入りに化粧が施されたうえ、戸外にかつぎ出して花見をさせ、宿うつりを行っている」と、行事の中でそのような場面があることがウィキペディアにも書かれています。

写真❻は上須恵口バス停近くの「田の天神」の遠景(遠くに見えるのが岳城山)、写真❼は「田の天神」の祠です。田の天神は田んぼの中の天神様、つまり太宰府天満宮に祀られている菅原道真(菅公)を指すのだろうと思われます。近くの交差点の名が「天神ノ木」とあるのとも関係があるはずです。天神様を祀るのも、このあたりが古くは太宰府天満宮(安楽寺)の荘園であったことを意味する、と思っていますが、はっきりした由来はわかりません。

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦